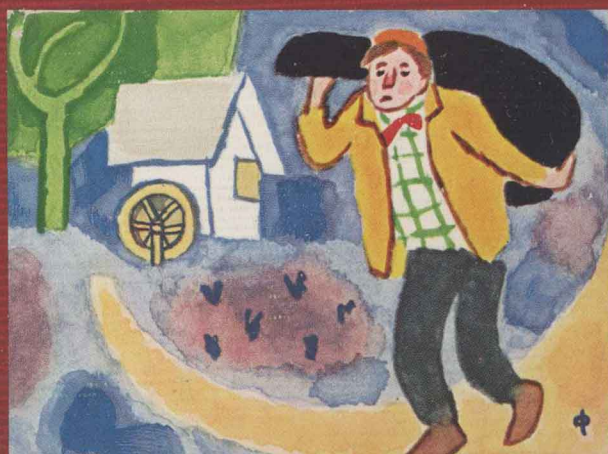


SYŌNEN SYŌZYO

Sekai Bungaku Tenmei



現代日本童話集

少女文学全集



日本編(4)

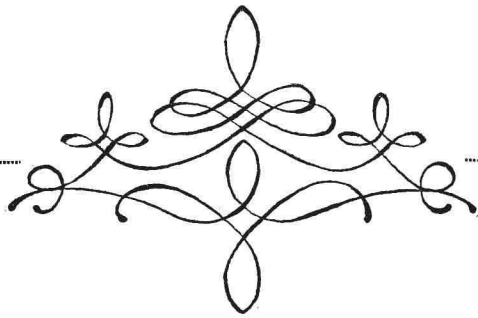
現代日本文学

名作集

講談社



48



少年少女世界文学全集48

日本編 第4巻

著者の了
解により
検印廃止

N. D. C. 913

講談社 昭和36

422 P 23cm

昭和36年5月20日発行

著者代表	やまもと 山本 有 三
発行者	野間 省 一
印刷者	北 島 織 衛

発行所 東京都文京区音羽町3ノ19 株式会社 講談社

振替口座 東京3930 電話 大塚(941) 大代表 3111

印刷 大日本印刷 | 背皮 株式会社石井

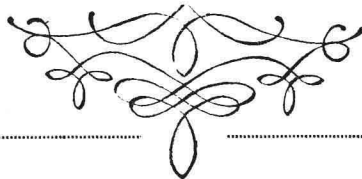
製本 大進堂 | クロス 日本クロス

本文用紙 本州製紙

定価 380 円

© 山本有三 昭和36年

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします



PRINTED IN JAPAN

目 次

少年 少女 世界文学全集

第 48 卷
日本編第 4 卷

小いぬポチ（「平凡」から）……………二葉亭四迷作…11

山椒大夫……………森鷗外作…31

春の鳥……………国木田独歩作…62

絵の悲しみ……………国木田独歩作…72

雪おんな……………小泉八雲作
高野正巳訳…79

耳なし芳一……………小泉八雲作
高野正巳訳…84

坊っちゃん……………夏目漱石作…96

千曲川のスケッチ……………島崎藤村作……………161

学生の家……………161

少年のむれ……………163

学窓の一……………164

学窓の二……………165

収穫……………166

伸びじたく……………島崎藤村作……………169

馬鹿一……………武者小路実篤作……………178

こぞうの神さま……………志賀直哉作……………191

清兵衛とひょうたん……………志賀直哉作……………201

一ふさのぶどう……………有島武郎作……………206

くもの糸……………芥川龍之介作……………215

鼻……………芥川龍之介作……………219

トロツコ……………芥川龍之介作……………227

てんぐわらい……………豊島与志雄作……………233

春をつげる鳥……………宇野浩二作……………239

いなごの大旅行

佐藤春夫作

243

路傍の石

山本有三編
福田清人

248

口絵のかわりに

248

中学志望

252

その夜のことば

258

実学

263

意地

264

赤糸

271

吾一

277

先祖と家から

281

うつりかわり

286

前かけ

292

やぶ入り……………297

物価騰貴……………301

東京……………305

だるまさん、だるまさん……………311

かんなん、なんじを玉にす……………314

いいわけではランプはつかない……………319

次野先生……………324

はえ……………横光利一作 330

ばつたとすずむし……………川端康成作 337

男と女と荷車……………川端康成作 341

屋根の上のサワン……………井伏鱒二作 346

いちじくのある家（「幼年時代」から）……………堀 辰 雄作…353

父と子（「幼年時代」から）……………堀 辰 雄作…358

赤がえる……………島 木 健 作…363

現代短歌……………木 俣 修編…372

現代俳句……………中村草田男編…385

解説……………福田清人
……………高野正巳
……………木俣 修
……………中村草田男

読書指導……………滑川道夫
……………斎藤喜門…415

読書指導研究会

装本 池田仙三郎
さしえ 富永秀夫

太田大八

深沢紅子

山崎百々雄

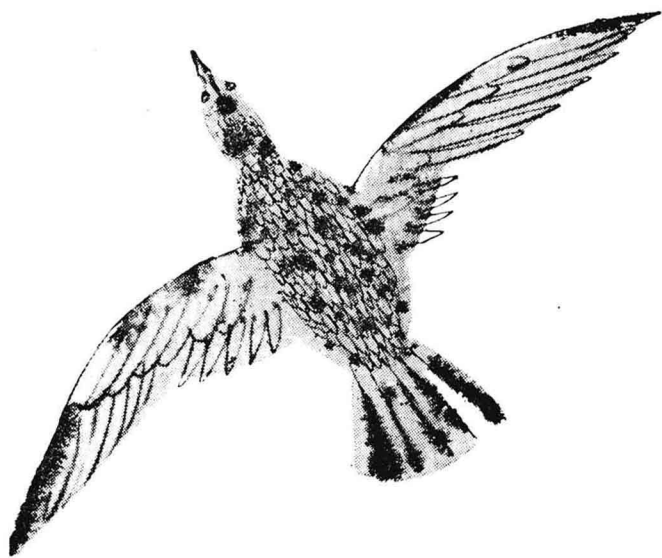
中尾 彰

斎藤三郎

裕 伊之助

げんだいにつぼんぶんがくめいさくしゆ

現代日本文学名作集



この巻の内容

について

明治、大正、昭和の時代のすぐれた作家たちの作品から少年少女のみなさんに、読んでいただきたいものをえらびあつめたのが、この巻であります。

明治維新（1868年）によって、わが国は、社会もすっかりかわり、外国の思想、文化がどんどんながれこみました。

文学もその影響をうけて、あたらしい方向へすすみました。人間性をおもひじること、人生の真実をもとめることなどです。

またいっぽう、印刷術の進歩で新聞、雑誌、単行本の発行がさかんになり、学校教育がいきわたって、文学の読者もおおくなりました。

文学を専門にする作家もおおくて、きそって、すぐれた作品を書き、ここに美しい文学の花園が、わが社会をいろどりました。

この巻に、その美しい文学、真実をもとめた文学の花々をえらんだわけです。明治20年ごろから、戦後におよんでおります。おとなのために書かれた作品ではありますが、みなさんにも読んでいただいてほしいものと、少年少女むきに書かれた作品と、あわせてえらんでのせてあります。

なお、比較的年代のふるい作品「小いぬボチ」「山椒大夫」「春の鳥」「絵の悲しみ」「坊っちゃん」の5編は、とくにむずかしいことばなど、多少いいかえたところがあります。

（福田 清人）

さしえ・とみたがひで お おお た だいほち ふかざわこう こ なか お しょう やまざき も も お
富永秀夫・太田大八・深沢紅子・中尾 彰・山崎百々雄・

さいとう きぶろう はぎ ま い の すけ
斎藤三郎・裕 伊之助

——二葉亭四迷——

小さいぬポチ

——「平凡」から——



ポチは、いうまでもなくいぬだ。

来年は四十だという、もう、びんにだいぶしらがも見える、きたないひげのおやじのわたしが、親についてはいぬのことを思いだすなどと、あんまりはかけていてお話にならぬ——とおっしゃるおかたがあるかもしれないが、わたしにとつては、ポチはいぬだが……いぬいじようだ。いぬいじようで、ちよつとまあ、弟……でもない、弟いじようだ。なんといったものか……そうだ、命だ、第二の命だ。

はじをいわねば理がきこえぬというから、わたしは理をきかせるためにあえてはじをいうが、ポチはまったくわたしの第二の命であつた。そのくせ、はじめをいえば、ほしくても

らつたいぬではない、やむことをえず……いや、やつぱりあれが天からさずかつたというのかもしれない。

わすれもせぬ、祖母のなくなった翌々年の、春雨がししととふる、うすら寒ある夜のことであつた。よいまどい（よいの口から）のわたしは例のとおりよいの口からねてしまつて、いつ両親の寝についたことやら、いっこう知らなかつたが、ふと目をさますと、ありあけ（夜あけまでの）がまくらもとをぼんやりとてらして、あたりはほのぐらく、しんとしているなかで、耳もと近くにみような音がする。

ゴーというかとすれば、スーと、あるいは高く、あるいはひくく、単調なひようしをとつて、さながら大のこぎりで大まるたをひきわるような音だ。なんだろうと思つて耳をすましていると、ときどきその音が、じぶんとじぶんの単調にあいたように、たちまちガーと、なれた調子をやぶり、すさまじい、しょうじの紙の供鳴りのするほどの音をたてて、いきおいこんでどこへといきそうにして、たちまちものにいきあつたように、はたとやむ。

と、しばらくひっそりとなる——そのそばから、すぐまたおだやかにスーという音が遠方にきこえだして、それが

しだいに近くなり、あらくなり、また耳もとで、こんきよく、ゴー、スー、ゴー、スーとなる。

わたしは夜中にめったに目をさましたことがないから、はじめはひどくびつくりしたが、よく研究してみると、父のいびきなので、やつと安心して、そのままたたびねむろうとしたが、さかんなゴーゴースーが耳についてなかなかねつかれない。しかたがないから、きこえるままにその音にききいつていると、思いなしでいろいろにきこえる。

あるいは遠がみなりのようにきこえ、あるいは波の音のようでもあり、または火ふきだるま(火をおこ)が火をふいてるようにも思われれば、ごろた道を荷馬車がおる音のようにも思われる。と、ふとひるま見た絵本(えほん)のてんぐが酒宴(しゅえん)をひらいているところを思いだして、おとっさんがてんぐになっておはやしをやつてるのじゃないかと思うと、きゆうになんだかうすきみわるくなつてきて、わたしは頭(かぶ)からすぽつと夜着(よぎ)をかぶつて小さくなった。

けれども、てんぐのおはやしは夜着(よぎ)のえりからもぐりこんできて、耳もとにへばりついてはなれない。わたしはじつとかたくなつてそれに耳をすましている、いつからともなく

おはやしの手がこんできて、あいのてに、遠くでかすかにキャンキャンというような音がきこえる。

ゴーというすさまじい音のときには、それにけおされてきこえぬが、スーというためいきのような音になると、それがはつきりと手にとるようきこえる。ふしぎに思つて、ますます耳をすましていると、あいのてのキャンキャンがしだいに大きく、高くなつて、ついにはいびきの中をぬけだし、それとははなればなれに、たしかに門前(かどまへ)にきこえる。

こうなつてみると、うたがいもなく小さいぬのなき声だ。ときどき、のどでもしめられるように、けたたましくキャンキャンとなきたてるそのこわじりが、やがてかばそくかなしげになつて、めいるように遠いところへきえていく——かと思へば、たちまちまた近くで、たえきれぬようになきだして、クンクンとはなをならすようなときもあり、ギャオとあくびをするようなときもある。

○

わたしはがんらい動物(どうぶつ)ずきで、なかんずくいぬは大好きだから、近所(きんじよ)のいぬはたいいていなじみだ。けれども、こんなか

「ほそい、いたいけな声でなくのは一ぴきもないはずだから、ふしぎに思つて、そつと夜着の中から首を出す」と、

「どうしたの。ねられないのかえ。」

と、母がねがえりをうつてこちらをむいた。わたしはこの返答はさしおいて、

「あれは白じゃないねえ、おつかさん。もつと小さいいぬの声だねえ。どうしたんだらう。」

「すていぬさ。」

「すていぬつて、なあに。」

「すていぬつて……だれかがすててったのさ。」

わたしはしばらく考へて、

「だれがすててったんだらう。」

「おおかた、どつかの……どつかの人さ。」

どつかの人がいぬをすててったと、わたしは二、三度くりかえしてみたが、わからない。

「どうしてすててったんだらう。」

うるさいよ、などという母ではない。どこまでもあいてになつて、その意味を説明してくれて、もうおそいからだまっておね、とやさしくいつて、またあちらをむいてしまつた。

わたしもまた夜着をかぶつた。いぬは門前を去つたのか、なき声がやや遠くなるにつれて、父のいびきがまたうるさく耳につく。ねられぬままに、わたしは夜着の中で、いまぎいた母の説明をくりかえしくりかえしあじわつてみた。

まず、どこかの飼いいぬがえんの下で子をうんだとする。

ちつぽけなむくむくしたのがかさなりあつて、首をもちあげて、ミーミーと乳ぶさをさがしているところへ、親いぬがよそから帰つてきて、そのそばへドサリと横になり、かたはしからかかえこんでぺろぺろなめると、小さいから、舌のさきでたあいもなくころころと舌がされる。ころがされては大さわぎしておきかえり、またよちよちとはいよつて、ぼつちりと黒いはなづらでおなかをさぐりまわり、ようやく、思うやわらかな乳首をさぐりあて、あわててチューとすいついて、小さな両手でもみたてもみたてすいだすと、あまいあたたかな乳がどくどくとでてきて、のどへ流れこみ、むねをくだつて、なんともいえずおいしい。と、わきの下から、まだ乳首にありつかぬ兄弟がはなづらでわりこんでくる。とられまいとして、うぶ毛のはえたうでをつっぱり、大さわぎをやつてみるが、とうとうとられてしまい、またそこらをたず

ねて、ほかの乳首にすいつく。

そのうちにおなかもくちくなり、親のはだでからだもあたたまって、とろけそうないい心もちになり、ついうとうとなると、くんだ乳首がぬけそうになる。ゆめごちにも、あわててまたすいついて、ひとしきりすいたてるが、じきにまた、たわいなくうとうとなつて、乳首がついに口をぬける。ぬけても知らずに口をあいて、小さな舌を出したなりで、いっこう正体がない……。

そのときたちまち、くらやみから、もじやもじやと毛のはえた、ふしくれだった大きなうでがぬつと出て、正体なくねいつているところをむずとひつかみ、宙につるす。おどろいて目をぼつちりあき、いたいけな声で悲鳴をあげながら、四足を張つてもがくうちに、頭からなかでつままれたよう

で、まっくらになる。きゆうくつで、いきがつまりそうだから、出ようとするが、出られない。しばらくもがいているうちに、ふと、あがきが自由になる。と、えりもとをつままれて、高いところからドサリとおとされた。うろうろとしてそこらを見まわすけれど、なんだかへんなさびしいまっくらなところで、だれもいない。ぼうぜんとしていると、雨にうた

○

「おっかさん、おっかさん、門の中へはいつてきたようだよ。」

と、わたしがなんだかいたたまらないような気になって、また母にいいかけると、母は気のなさそうな声で、

「そうだね。」

「出てみようか。」

「出てみないでもいいよ。寒いじゃないかね。」

「だってえ……あら、あんなにないてる……。」

と、おりからたえるようになきいぬの声に、わたしは